

Y14b **Mitaka-3Dを使ったペルーにおける天文教育**

根本しおみ（ペルー地球物理研究所、国際協力機構）、伊東昌市、縣秀彦（国立天文台）、Mario Zegarra, Jose Ishitsuka, Adita Quispe, Orlando Martinez（ペルー地球物理研究所）

プラネタリウムは天文教育ツールとして有効な施設だが、発展途上国において、プラネタリウムを建設する事は資金の問題で非常に困難である。国立天文台で開発された Mitaka は2台のパソコン、2台のプロジェクター、偏光フィルターと偏光メガネ、シルバースクリーンがあれば宇宙のシミュレーションを立体視で楽しむことができ、プラネタリウムのような施設を建設する事に比べたら、比較的安価な機材で実現できる。このため、発展途上国においても構築可能な天文教育ツールである。ペルー地球物理研究所では、2011年から、国際協力機構よりシニア海外ボランティアと機材の支援を受け、Mitaka のスペイン語版を作成し、Sala 3D（3Dの部屋）としてプラネタリウムと平行して一般への公開を開始した。以降、多くの来館者がプラネタリウムと Sala 3D を両方見に行くため、天文教育としての効果も増進していると考えられる。また、Mitaka 3D 投影システムは、館の外に持ち出して出張投影もできるため、これまで9カ所のペルー国内の地域に出張投影を行い、地方の人々へも天文学の普及を行うことができた。発展途上国における、Mitaka 3D 投影システムの天文教育ツールとしての有効性を報告する。